

「なんしとんねんっ、ぼけっ」。北陸で10店舗を展開する「らーめん世界」の厨房では時折、先輩が関西弁で後輩をしかり飛ばす。それを快く思わない客から、店を経営する「翔志」(白山市)にクレームが入った。「あの店長はひどいよ」。苦情の内容は、社長の石野康弘(39)の耳に伝わるのだが、石野はいつも苦笑する。「ああ、俺や。またやりすぎたわ」。

### 毎日が勝負

本社社長室に電気がともることは、ほとんどない。「料理を進化させた、部下の成長を見守りたい」。石野は常にどこかの店の厨房に立ち、皿

洗いから調理まで、店員と同じように働く。金沢市西泉2丁目の1号店に掲げられている看板は「毎日が勝負」。全力投球を怠って後悔してほしくないから、部下にも一生懸命を求める。石野は野球少年だった。富山市西部中時代はエースの座をつかむため、人の倍は練習した。しかし、2年の秋に監督から渡された背番号は「11」。石野は控え投手に甘んじることになった。

ある試合で、石野は監督に救援の準備を命じられた。投げ込みを始めたが、その回は登板がなく、

## 屈辱の背番号11 全力投球の糧に

攻守交代を機に投球練習をやめた。「監督がやめろというまで投げるべきでした。『やらせてください』って必死にアピールするべきやった」。結局この試合で石野に登板の機会はなく、以降、投手としての練習をさせてもらえなかった。

そんな石野の闘志に火をつけたのが、監督の中

がない。石野は野球から遠ざかり、仲間とつるんで、けんかに明け暮れるようになった。富山第一高に進んだ石野は、やんちゃな先輩に誘われてバレーボール部に入った。やる気はさほどなかった。

川恒夫だった。中川は石野を本気でしかった。石野は自分を真剣に見てくれることがうれしかった。「この人を喜ばせた。掃除用のバケツに残った水をすすりながら、厳しい練習に耐えた。

### エースナンバー

元々、身体能力は高く、

身長も180センチある。石野はめきめきと上達した。2年の秋、中川がユニホームを手渡すため名前を呼ぶ。石野に与えられた背番号は、中学時代に手が届かなかった「1」だった。

石野はエースアタッカーとして富山第一高を県大会2位に導き、国体の選抜メンバーにも入った。今、社長室には背番号「1」の赤いユニホームが飾られている。しかし石野は、苦い思い出の背番号「11」を胸に刻んでいる。常に全力投球するため、あの悔しさを忘れたくない。何度車を買って換えても、ナンバーは「11」に決めている。(道上宗雅)



社長室に飾られているバレーボール部時代のユニホーム  
＝白山市田中町の翔志本社